頑張っていた私と、頑張れていない私

はじめに

私とダンスの出会いは、小学校四年生のときに参加したクラブ活動でした。「あなたってダンス習ってるの？　上手ね～」。こんな先生の褒め言葉から私はダンスを習おうと思い立ち、次の週にはクラブ活動の先輩たちが通うダンス・スクールに通い始めました。とにかく踊ることが大好きで、振り付けを真似して音楽に合わせて踊ったり、発表会に参加して人前で披露したりするのも好きで、毎週ダンス・スクールに通うのが楽しみで仕方ありませんでした。

中学時代のダンス生活

中学一年のときまで同じ先生に習っていて、偶然、幼馴染のユウキの家に遊びに行ったときに、彼のダンスの先生だった山本という人に出会いました。出会った当初の山本は、ダンスのインストラクターをやりながら、スイミングスクールの先生もやっていて、まだダンス一本だけでは食べていくことは難しいときでした。

私は初めて山本に会って、山本は私に向かって、最初の言葉が、「学校楽しい？」で「微妙」と答えたら、「微妙って言うお前が微妙だわ」と冷たく言われ、「きっつい人だなー」と半泣きになりながら思いました。それから母が迎えに来るまで、私もダンスを習っていると話したら、ダンスの基礎的なことや音楽のジャンル、リズムの取り方を教えてくれました。

私は小学四年のときからダンスをやっていたのに、基本的なことを知らなかったので、山本から初めて学ぶことがたくさんあって、最初の印象は怖かったけど、良い人だなって思い直しました。帰り際に、「毎週日曜にレッスンしているからお前も来い」と言われて、そこから毎週小牧駅で山本とのダンス生活が始まりました。

初めは、私と山本ともう一人女の子での三人のレッスンだったが、次第にユウキや山本が教えているスタジオの子達も駅で踊るようになり、私もダンスで関わる友達がたくさんできました。

駅で踊るようになってからは、そこで踊っている人たちが山本の周りに寄ってきては山本と仲良く話をしていて、「色んな人から慕われてるんだなぁ」と感じていました。

イベントに出たときも、私たちの踊りを見た他のダンサーから、「君たちは山本ちゃんの生徒さんだよね。すぐ分かったよー、これからも頑張ってね」など声をかけられたりすることが多かったです。だから私は、「山本ってダンスも上手いし、みんなの人気者だ」と思っていました。

山本といると、いろんな大人と接することができたし、自分の世界が広がっていくようでした。とにかく毎日楽しくて、ダンスももちろん大好きだったが、山本や仲間たちと一緒にいる時間が、私の中で大半を占めて、学校よりも充実した時間を過ごしていました。みんなといる時間や場所が大切でした。

中学時代は、友達と遊ぶ時間よりも、部活よりも、勉強よりも、ダンス優先の生活でした。中学にもそれなりに友達もいたし、まあまあ楽しかったけど遊びの誘いを断ることが多かったから、ダンスを理解してくれる子しか友達は残りませんでした。それでも、「自分にはダンス仲間や山本がいるし全然さみしくないわ」と思っていました。中学のときは友達に、「みちはダンスすごいよね」、先生からは、「お前からダンスとったら何も残らんやろ」って言われるくらい、中学の私はダンス一色でした。

しかし、中学三年になったときに私はダンスと受験の壁にぶつかりました。両方ともちゃんとこなしたくて、ダンスも辞めたくなかったので、ギリギリまで両立しようと思い、レッスンをして、終わったら塾に通い、塾で居残りをした後、夜一二時くらいから駅に戻ってダンスをして、帰ってからは勉強をして、テスト期間中などは毎日三時間くらいの睡眠しかとっていませんでした。ダンスと受験勉強をやっていたときが、今までの人生において一番、私も母も大変なときだったんじゃないかなって思います。

母の支え

母は私の生活中心で動いてくれていたので、朝起きて学校に行き、帰ってきたら私はそのまま塾へ行き授業を受ける、そして夜一二時くらいに塾に迎えに来てもらって駅へ直行し、私が帰るときまでずっと駅で座って私のダンスを見てるという生活でした。私はまだ未成年だったので、大人と一緒に深夜にダンスをやっていると警察が来たりして、親が一緒にいないと補導されてしまうので、常に母は一緒にいました。受験期に補導をされてしまうと、中学にその情報が洩れて、自分の内申にも響くんじゃないかという不安もあったので、母が一緒にいてくれることは心強かったです。

母の私への協力体制というのは本当に感謝しています。でもそのときは、どの親も自分の子供へのサポートは全力だったし、私の家が特別だったわけではありませんでした。だから、山本と一緒に何かをやるってことは、子供だけじゃ成り立たなくって、親の援助というものが必要だったと思います。送り迎えはもちろん、衣装代やイベントの交通費など、私はただダンスが好きだという一心でやっていましたが、その裏では親が一生懸命私を支えてくれていたのだと思います。

母は私がどんなに遅くまでダンスをしていて自分の睡眠が削られようとも文句は一切言わず、「みちが納得するまで踊っていけばいいよ」と優しく見守ってくれていました。

十分な睡眠やごはんを食べる時間がないときもあったので、栄養ドリンクを毎朝飲んで生活していました。こんなにも大変な生活だったにもかかわらず、私にとってこの生活が全く苦ではありませんでした。体力的には辛い日々だったけど、勉強をして駅に行ったら山本や仲間がいて、みんなと過ごすことがなによりも楽しくて、「みんなとずっと一緒にいたい」って思っていました。

深夜二時とかになってくると母が、「そろそろ帰るよ〜」と言って、「まだ帰りたくない、もうちょっと踊っていく」ってのが普通

でした。私はまだみんなが踊っているのに、私だけ帰らなくちゃいけないのが本当に嫌でした。そんな生活が夏まで続き、私は自分で決めて、夏過ぎてからは受験一本で頑張ろうと決心していったんダンスはお休みすることにしました。

受験のときは、「第一志望に合格したい！」と強く思っていたので、小牧駅に行ってみんなとダンスをするということは少なくなり、ただひたすら勉強していました。たまにみんなに会いに行って、みんなと話すことが勉強の生き抜きになって、「早くみんなとダンスしたいな～」って思いながらみんなとバイバイする日々でした。

それに仲間たちが応援していてくれたから、「受験乗り切って、みんなとまたダンスやるぞ」と考え、受験に集中していました。そして無事、高校は第一志望に合格することができました。

高校生活とダンス

高校に入学してからは山本に、「高校生は大人だから、俺はもうお前らの面倒はみない。まずは曲と振りを作ってそれから俺がみてやる」と言われ、自分でチームを持つようになり、リーダーとしてメンバーをまとめたり、振りを作らなければいけなくなりました。はじめ私は、「自分がリーダーで自分のチームを持つことができた、嬉しい」と純粋に思っていました。でも、前まではみんなで楽しく与えられたものをこなしていたのに、自分でゼロからやらなければいけないというのは私にとっては大変で、面倒なことでした。「ダンスが好きなのに、振りが考えれない、私はただみんなと踊るのが好きだから、山本から振りをもらってそれをみんなで踊りたかったのに」って思っていました。

山本とは中学一年生のときに出会って中学三年生までずっと近くで教えてきてもらっていたから、私はこれからも変わらず山本がずっと教えてくれるものだと思っていました。でも、やらなくちゃいけないから、頑張ってやってみようと思い、チームで振りを考え曲の編集など手探りで始めました。

これと同時進行で高校に入学して新しい友達や新しい環境、名古屋や栄で遊ぶ楽しさを覚えていきました。新しくできた友達は中学の子たちとは違って、自分と同じような子が多かったからすぐに仲良くなって馴染むことができました。私は毎日学校に行くのが楽しくて、「この高校に入学できて本当によかった」と感じていました。

一方でダンスのほうは、まだ振り付けに苦戦していて、「ゼロからやることが楽しくないわけじゃないのに、なんで前みたいに楽しいって思えないんだろう？」と疑問を持ち始めました。

それは振り付けが作れないというよりも、中学時代のように一緒にやっていたメンバーがいないし、みんな別々のチームに別れてしまって、山本もいないし、前の環境や人間関係が好きだったから、それがないというのがつまらないと感じる原因でした。

あとは、自分がリーダーだから。昔だったら自分が年下だったから、みんなに可愛がってもらえて、ちやほやしてもらえてよかったのに、下の子がいるから気を使ってまとめて、振りを考えて…と全部のことに楽しさというよりも義務的のような気持ち、

しなければいけないものに変わっていってしまいました。
ダンスを始めたときの純粋に踊るのが楽しいとは思えず、チームで集まるときも気持ちが上がらず、でも行かなくちゃ、やらなくちゃと思って駅でダンスをしていました。全部がつまらないということではないけど、山本や仲間たちといる時間が好きだった私は、今自分がやっていることが義務的なものになっていっていると感じ、高校で新しい居場所ができて、そこに落ち着きたくなりました。
私は山本の近くで踊っていたかったんだと思います。でも、それは不可能で、比べるのはおかしいけど、同じチームの子達よりも高校の新しい友達のほうが私にとって楽しい存在になっていったんだと思います。「別にみんなのことは嫌いじゃない、でも必死にここまでやる理由はなに？　すごい楽しいとは思えない」。これが本音だったと思います。
中学のときはただがむしゃらに山本と一緒にいることに必死で、山本に褒められたい、認められたいっていうものが強かったんだと思います。でも、だんだん山本が遠ざかっていくにつれて私の気持ちも低下していきました。
学校ではなにも考えず、淡々と授業を受けて友達と話して笑ったり遊びに行ったりと、ダンスをしてるときよりも笑っている自分がいました。ダンスをやっていたから、みんなよりも帰る時間が早かったり、予定が合わなくて自分だけ遊びに行けないときがあって、それがすごく嫌でした。
「なんで自分だけ早く帰らなくちゃいけないのだろう、ダンスなかったらまだ遊んでいられるのになあ。高校の友達ともっと一緒にいたいし、ダンス楽しくなくなってきたし、もうやめようかな」って軽く思って、まずはチームの一番年上のじゅんちゃんにダンスよりも友達と遊びたいっていうことを相談したら、「みちはまだ若いし、またやりたくなったら始めたらいいんじゃない？　とりあえず、山本に話さなくちゃいけないね」と言われ、全体練習のときに話そうかということになりました。私は辞めるということに対して軽く思っていたから話せば分かってもらえると思っていました。でもそれは私のただの思い違いでした。

ダンスから距離をもって

全体練習の日の最後に、「誰か何か連絡あるか？」と山本が言って、私は言い出さなくちゃいけないのに、言えませんでした。そしたら、じゅんちゃんがみかねて、「みちは夏のイベントの前にチームから外れて、ただのレッスン生に戻りたいらしくて、山本に言わなきゃいけないことがあるそうです」と言ってくれました。それからほとんど何と言ったか覚えていないが、「私はダンスの生活よりも高校生として友達と遊んでいたい」という話を山本含め、山本が率いていたグループ全体のみんなの前で話しました。
「そしたら、山本が怒り出して私に手を挙げました。顔を殴られ蹴られ、地面に顔面当てたりと、結構、悲惨な殴り方を受けました。私は泣きながら耐えていました。「お前は俺たちを裏切るのか」。小学生の子達に向かって、「こいつは裏切り者だから、こいつとは一生関わるな」、「お前は何を考えてるのか」と言われ

ながら、抵抗するわけにもいかず、ひたすらその暴力を耐えるしかありませんでした。終わったあと、最後に、「お前はどうするんだ」と問われ、辞めると言えず、「このまま続けていきます。みんなを裏切ってしまってごめんなさい」と言いました。

このときにちゃんと辞めれなかったのは、山本が怖かったのはもちろんあるし、「逃げちゃいけない、逃げれない」と思ったからです。みんなに見られて殴られて、ちょっとしたパニックになっていたんだと思います。あんなに殴られたあとに言葉なんて出てこなかったし、「なんであたしが殴られなきゃいけないんだ、辞めるってことがこんなに殴られるほどダメなことか？　みんなの前で殴られたくなかった、でも私はみんなを裏切ったから殴られたんだ、自分最低、山本は悪くない」とか、頭の中はぐっちゃぐちゃで、泣くしかできなくってスタジオを出ました。

自転車に乗って母に電話して小牧駅に向かいました。母は私が殴られたことを聞き、すぐに駆けつけてくれました。私は泣きながら電話越しで、「殴られたよー、みちが悪いから殴られたの、山本は悪くない、私が悪い」と言っていました。当然、母とお父さんはものすごく怒って、訴えるなどの問題になったが、私がそれだけは辞めてと言い、訴えないように説得させました。

母は私が殴られた後に、「みちがこんな風にさせられて黙っとけない、山本と話をする。みちは来ちゃダメだよ」と言われ、母は山本に電話をかけました。私は何を母が言うのか、すっごく気になったので、こっそり内容を盗み聞きしました。あまり近くには寄れなかったけど、山本が私をあんな風に殴ったのはみんなへの見せしめだったらしいです。これは母から聞いたことなので、本当かどうか分からないけど、誰かが辞めるって言えば、こうなるぞ！　みたいなものだったらしいです。それから母は、「あの男だけは一生許さない」と言い続けています。当時は私の顔は腫れたままで、口の中は切れて血だらけの状況で、お父さんと顔を合わすことができず、ずっと部屋に閉じこもっていました。

ダンスを辞める決意

私はそれからもみんなとダンスを続けていったが、あのことがあってから、メンバーとの距離感や気まずさ、山本と正面から向き合うことができなくなってしまいました。山本とは以前のように話したいと思っても、いざ話そうとすると、震えてしまって怖いと思ってしまい、話すことができなかったです。私が辞めると言った日から、小学生の子達は私のことを避けろと言われていたので、話すこともしなくなり、誰も、「みっちゃん」と声をかけてくれることはなくなりました。

私も山本から、「俺の教え子には近づくな」と言われていたので、私も声をかけることはありませんでした。スタジオの発表会のときも私はみんなと同じ曲で踊れているのに、楽しいとは思えませんでした。私が大好きだった時間や場所はなくなっていってしまいました。誰も私に話してくれる人はいませんでした。

でも、この状況を作ってしまった原因は自分なんだから、今は仕方ないと思って我慢していました。みんなと一緒にいるっていうのが好きだった私が、みんなからも遠ざかってしまって、自分

がここでダンスをする意味が分からなくなりました。それでも、続けると自分で言ったんだから夏のイベントは出なくちゃと思って、みんなからは避けられているなか、山本とも向き合えないまま、練習していました。心の中で、「みんなに認められるようにしなきゃ、人一倍努力しなきゃ」という気持ちと、「もう辞めたい、もう頑張りたくない」という気持ちの二つで揺れていました。

夏のイベントが終わっても、山本とはほとんど話さなくなってメンバーにもすごく気を使ってもう中学のときの楽しさには戻れないなと思って、チームも解散してすべて終わらして、スタジオから身を引く形で辞めることになりました。私が好きだった時間はもう終わったのだと思いました。

ダンスは居場所だった

私はダンスが好きで、山本と出会ってさらにダンスを好きになったけど、私が固執していたものはダンスではなくて、山本や中学のときにみんなとふざけあったりしていた、時間と居場所と仲間だったのではないかと思います。

ダンスが好きなのではなくて、みんなが好きという気持ちのほうが強かったのだと思います。辞めると言ったときに自分の考えがおかしい、自分が悪かったと昔は自分を責めていたけれど、辞めるという選択は間違っていたわけではなく、私と山本とのダンスにかける価値観が違ったから生じたことだと思いました。

価値観が違うまま無理に合わせていても限界がきてたと思うし、当時は高校が楽しいからという理由だと思っていたけど、これを書いて私は山本が思う気持ち、モチベーションについていけなくなっていったのだなと気づきました。それを中学のときの自分も分かっていたら、素直に殴られもせず山本と良い関係のまま今も良い付き合いができてたんじゃないかなって、少し期待してしまうところもあります。

殴られたことはすごい痛かったし辛かったけど、山本とみんなと楽しく過ごせた約三年間は私にとって、ものすごく意味のある大切な時間でした。今までの人生の中で一番自分が輝いていた時代だったと思います。だから、ここには書ききれないくらいの楽しかった思い出がたくさんあるし、最後は良い終わり方ではなかったけれど、私の中では充実したキラキラした三年間でした。

頑張れない今の私

ダンスを辞めてからは、こんなにも夢中になるものがなくなってしまって、目標とかがあってもダンスをしていたときのような、必死に頑張るということができなくなってしまいました。私はダンスをしていた三年間が自分にとって過去の栄光であって、今もそれは変わらないのです。二十年間生きてきて一番頑張ったことは今でもダンスなのです。

私は、大学受験も留学も経験したけど、ダンス以上には頑張れなかったのです。もうダンスはやっていないし、山本にも後悔はないのにこの内容を書いたのは、私がダンスを辞めてから、過去

を超えることができていないからだと思うのです。
私がこだわっていたものは、昔の頑張っていた自分と、今頑張れていない自分なのだと思いました。今、まさにその葛藤が私の心の中にあるのです。
現に母からも、「みちは、昔は頑張り屋さんだったのに、今は何も頑張れていない」、「あんたにお金たくさんかけてやってんのに、なんにもやってないじゃない」、「あのときは応援していて楽しかった」と最近よく言われます。言われるたびに、「私も変わりたい、でもどうやって頑張っていたかも分からない、どうしたらいいの？」と自分に問いかけても答えは出てこず、母の言葉に悔しい気持ちと自分が情けなくて、泣きたい気持ちに時々なります。昔のようになりたい、戻りたいとう気持ちはないけど、「どうしてあんなにも夢中になれたのかな」という過去の自分に羨ましい気持ちがあります。
しかし、羨ましく思っていたって、過去は過去で、過去の自分に戻ることなんて無理なのです。だから、これを書いた今、私が気づいたことは、昔は、過去は…って思うのではなくて、今をちゃんと見つめて、未来へどう自分が進んでいけるかが大事なのではないかなって思います。過去の栄光にずっとしがみつくのではなく、今自分がどうやってポジティブにすべての失敗や経験を活かせることが大事だと思うのです。
ダンスをやっていた自分よりも今の自分をちゃんと認めてあげられる自分でいたいのです。もう一度母に認めてもらいたいのです、応援したいと思われたいのです。それはどうしたら達成できるのかは分からないけど、これから始まる就職活動が自分にとって新たに踏み出せる一歩になれるように、自分と向き合っていくことが私には必要だと思いました。